

寫眞週報

内閣情報部編輯  
六月八日・第十七號



赤十字のもと  
徐州放送





健康な船の旅のか

瀬戸内海へ  
南紀州へ



大阪商船

赤十字のとも  
輝く白衣

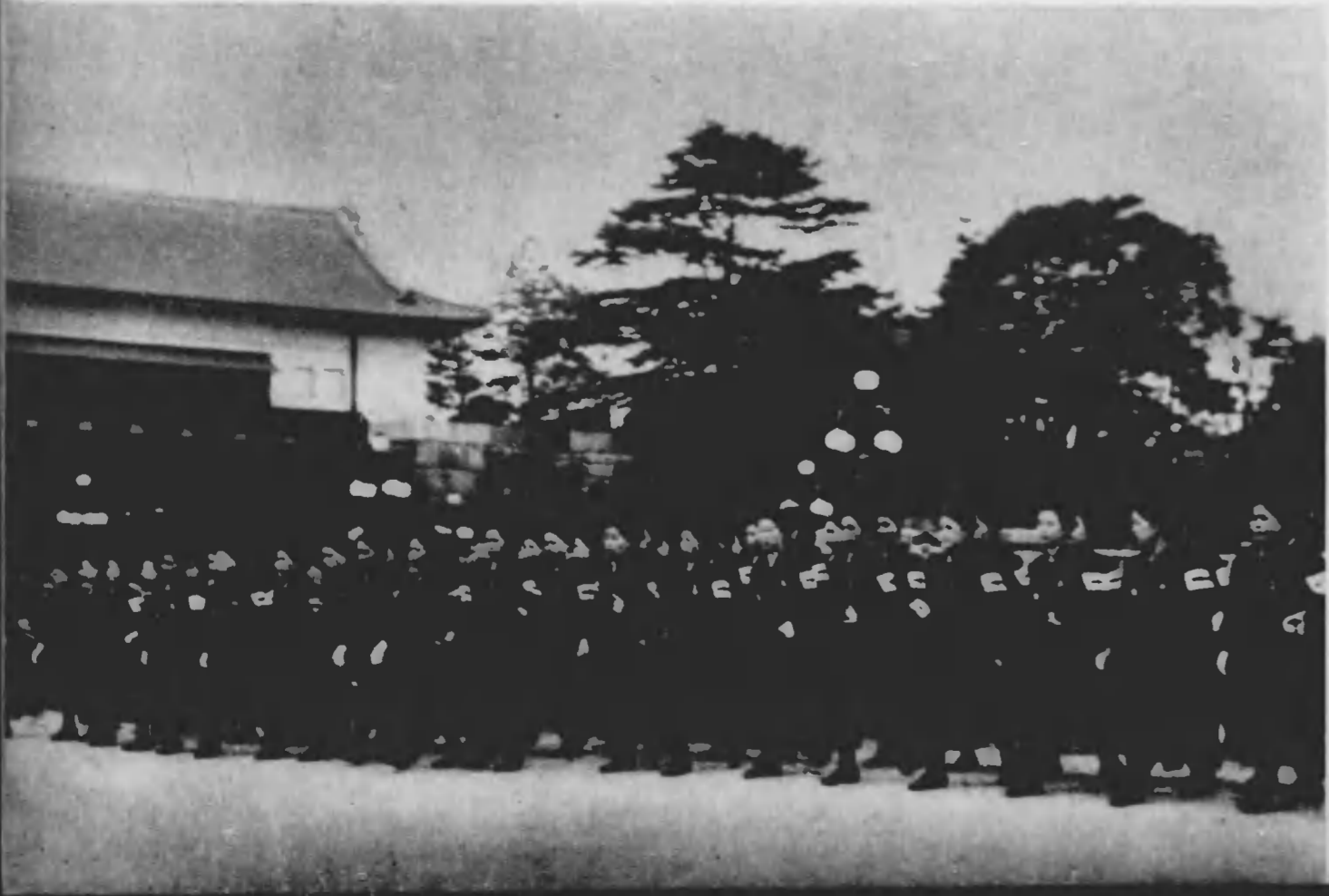
博愛の表徴、赤十字旗がわが國に、ひろがへつてからもう六十年あまり、その間いくたびか戦争の試験を經ながら、日本赤十字の尊い使命を、かぬい肩に擔つた白衣の天使、たちは、世界赤十字事業の上に、その氣高くも雄々しい姿をくつきりと浮き上らせてきたこの度の事變にも、大陸に派遣された赤十字看護婦は、既に三千余名を數へ、砲火炸裂する戦場で、或ひは波浪さかまく大海原の病院船勤務に、敵味方わけへだてなく、犠牲博愛の一念に燃えて看護のまことを捧げてゐる。

たゞ赤十字愛に殉じよう、といふその叫々しい覺悟は、忠勇無比の皇軍精神と何の劣るところがあるらうか。

愛の大和魂を純白の衣に包んで戦時救護にいそむ赤十字看護婦の一時一刻の生活こそ、輝く日本歸道のすべてがある。



あらゆる危険、困苦と大にかひ野戦病院、病院船勤務に一身を捧げて幾月、再び宮城を拜せるとは何人が推期してゐたらうか。高感安、副還奉告を終へて、硝煙に染まつた赤十字院車もたふとく、差々宮城前を行進する看護看護婦班。



出征から  
歸還まで

つひに召集令は下つた。屋上に配る皇太神宮、明治神宮、そして、種々の女神となつた先軍英靈二十七柱も合祀される靖國神社の社前に祈願をこめ、神酒を飲べば、えらばれた大和撫子の感激が胸にたぎる。



彼女も船よひに悩まされ、食事も攝れず込み上げてくる嘔吐を手中で押へながら甲斐甲斐しく働いてくれる。夜半にふと目覚めベットに腰かけて青白い顔で電燈に照らされてゐる白衣の姿を見ると、一種崇高の念にうたれて覺えず涙がこぼれた。 (岡本軍醫少將病院船手配より)

海ゆかは終一線描きたる病院船のいさを立てなむ！ 同方二月、赤崎良幸さん作。うら若き女の身に浴びる、出征萬歳！ の聲も、赤十字看護婦なればこそ。この日の歡喜、この日の光榮を、征衣の胸にはつて、博愛の戦士達はいまぞ住みなれた病院を出てたつ。





傷兵の母



（父母はいかにあらず）  
手紙を書くいとまなく数句——  
看護の合間に收容患者の右手となり、ふるさとへの大よりの書けば、いつか自らも思郷の心、こまごまとそのまゝ文字に綴つてゆく。



すやすやと静かなねいき聞きつつもなほ眼きみる病める勇士を——  
第一六八巻 藤野野江さん作  
傷の痛みに悩んでゐた戦傷兵達もやうやく安らかな眠りを捕れるやうになつた。ほのかと明けた朝、乙女心は、交替のかへりにそつと花の水をかへてまわる。

「見逢へる程よくなつたわ」と、けふも元氣づけながら、二人で、まごころを細帯に巻けば、戦傷兵も「うん、もうすぐ歩けるやうになるさ」と、うれしくも、痛みをこらへてくれる。



傷癒える悦びを音調にのせて、アコーディオンを弾く白衣の勇士。笑顔をもち、ちつと流れるメロデーに耳を傾けてみると、傷兵の歡喜が、そのまま胸にかよつてくる。

「松葉杖の具合はどうだい？」  
「はう、貴様も、車で診療にゆけるやうになつたか？」  
勇士の交す會話の明るさ。  
胸にこみあげるいひしれぬ感激を、一杯の笑ひにまぎらして、窓にあふれる陽ざしの中に車を止める。



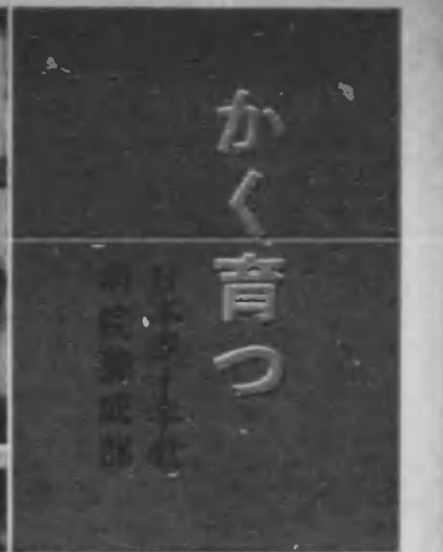
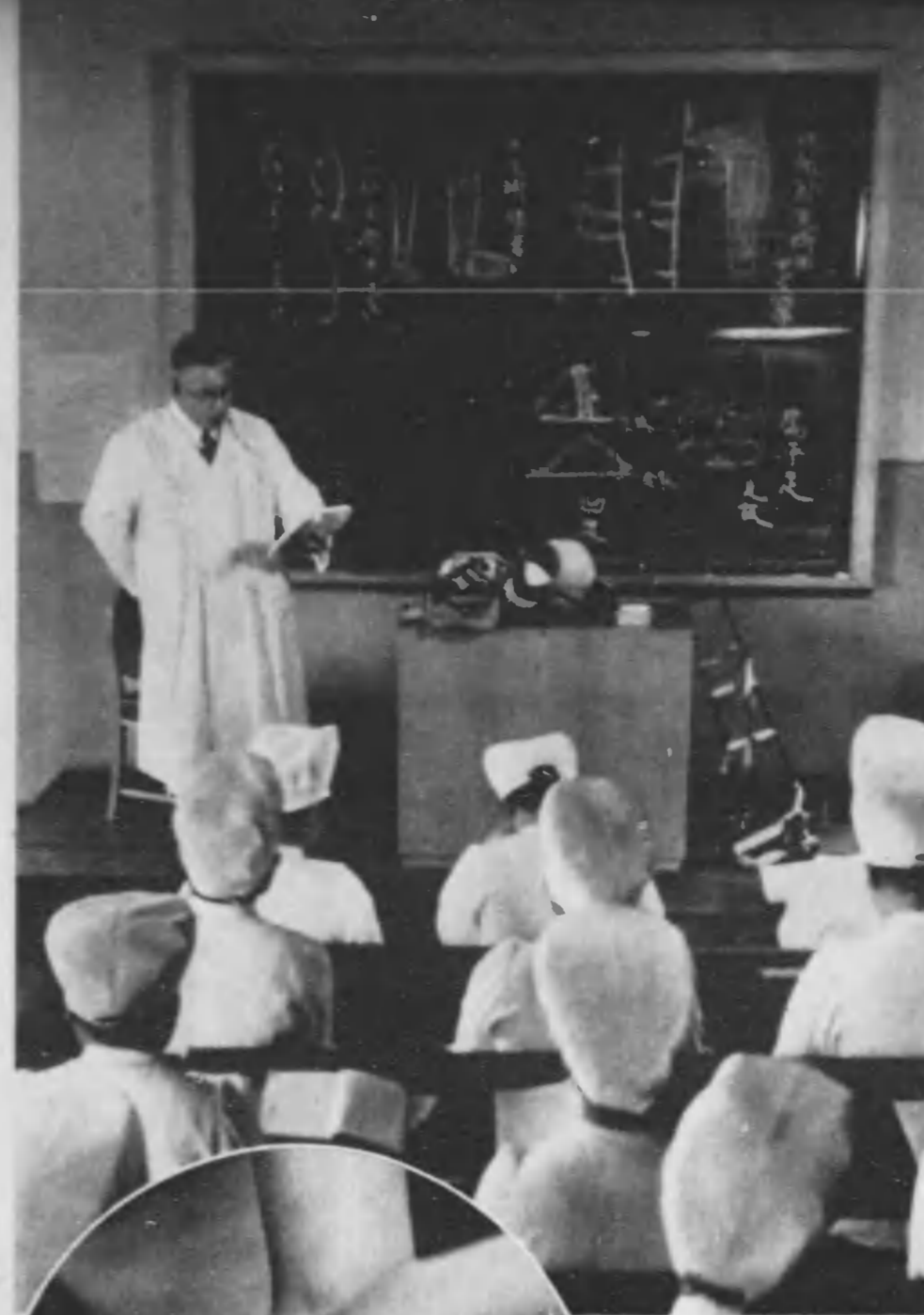


その細やかな姿勢にあふれる母道の精神。妹をなれた矢は、統一された精神となつて、我々の身を射ぬく。彼女達の純正の身、射ぬく。なす、着るきは、たへざる母道への精進から生れてゐる。

お裁縫も女学校だけでは十分でないといふので、養成部に入るとどんな着物でも縫へるやう、講師が一人一人手をとつて教へる。夕食後、間もなく一年一週間の閉省休みを樂しみに、乙女心はせつせと時針を縫ふ。

この夜更け病舎をみとる運回のみとりのめは、かそけく響く。七時の交替時間、ひき上げる學友と隣正しい黙禮かはし、つらい徹夜實習へと長い廊下をいそぐ氣にかかるは、傷の痛みに悩む看護士、熱の下らぬ一般患者。

# 養心寮



副監督 山本やを女史(下右)

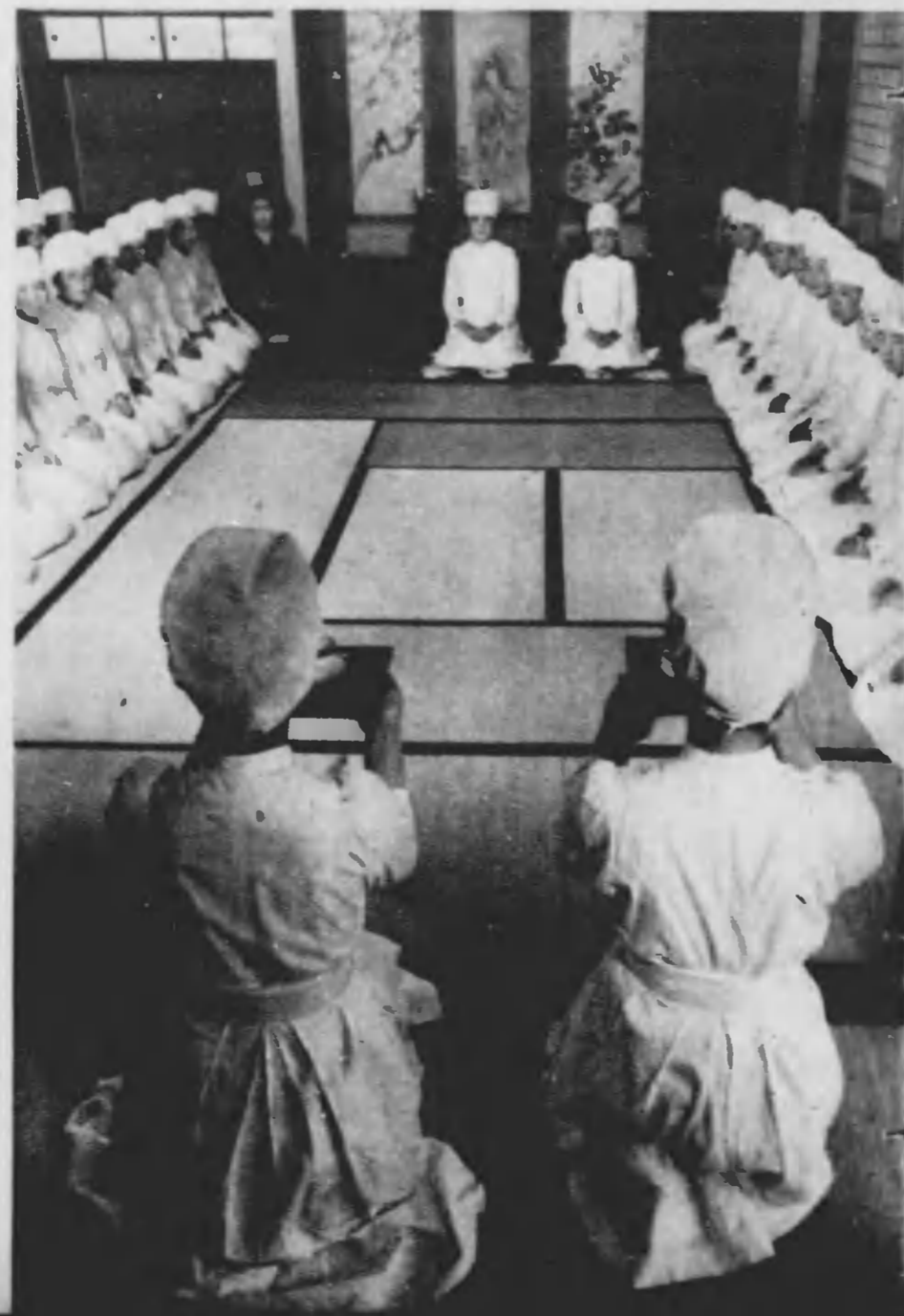
日本赤十字社病院長  
醫學博士 藤波 正氏(上)

養成部長 廣岡道明氏(下左)

明るい教室で養成部一年生の講義。



手は心、乙女たち、無高く生きて、何んといふまよらかな笑しさであらう。光であらはこの手。



入學すると、世界一の設備を誇る實習室で、さつそく人形や級友を相手に基本演習が始まる。敷布とり換への演習。先生は、養成部卒業後津田英學のために給費生として學び看護學研究のため英國セント・トーマス病院に派遣された井上夏枝看護婦長。

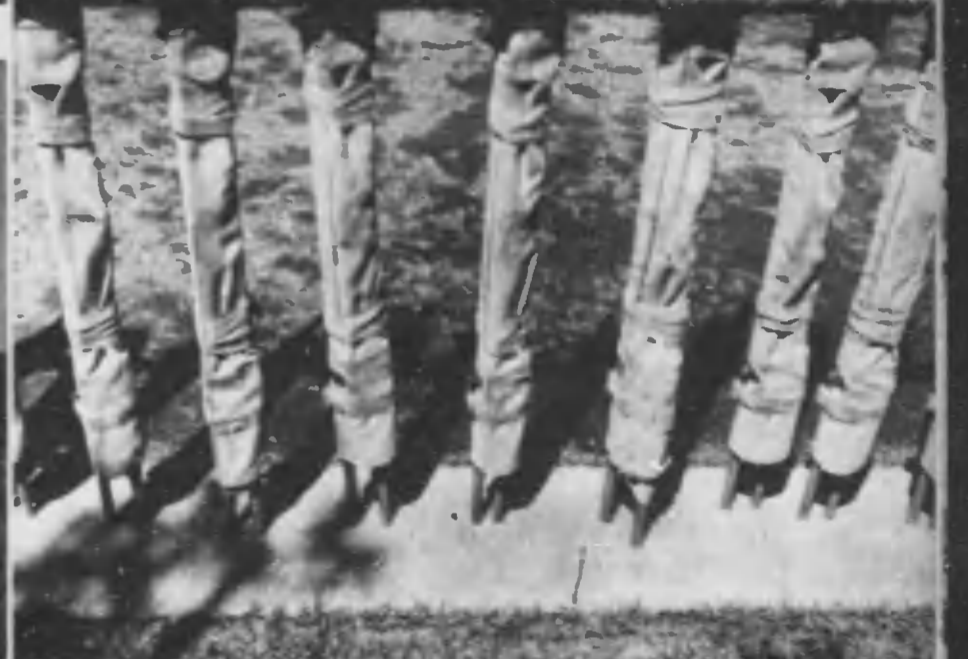
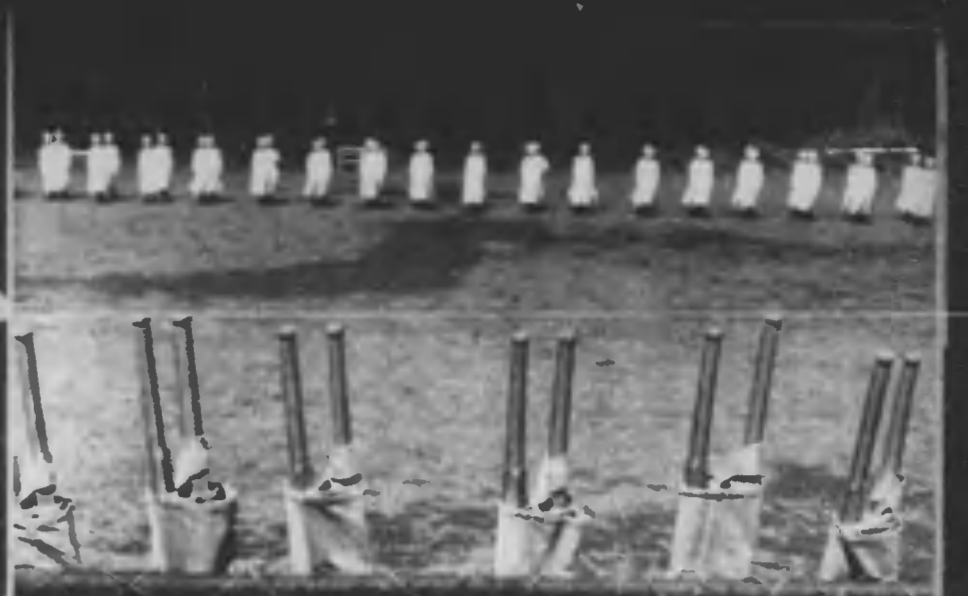
日本赤十字看護婦は又立派な日本婦人ではない。病む人へのしとやかなしづき、大和撫子としてはつかしからぬ動作、心構へをお作法の時間で養ふ。



病院から十時の清  
 掃の音、看護婦さん達  
 が、うさぎの足音かへる  
 音、暗い夜、それぞ  
 れの生活を、さ、やかな  
 りに始めて



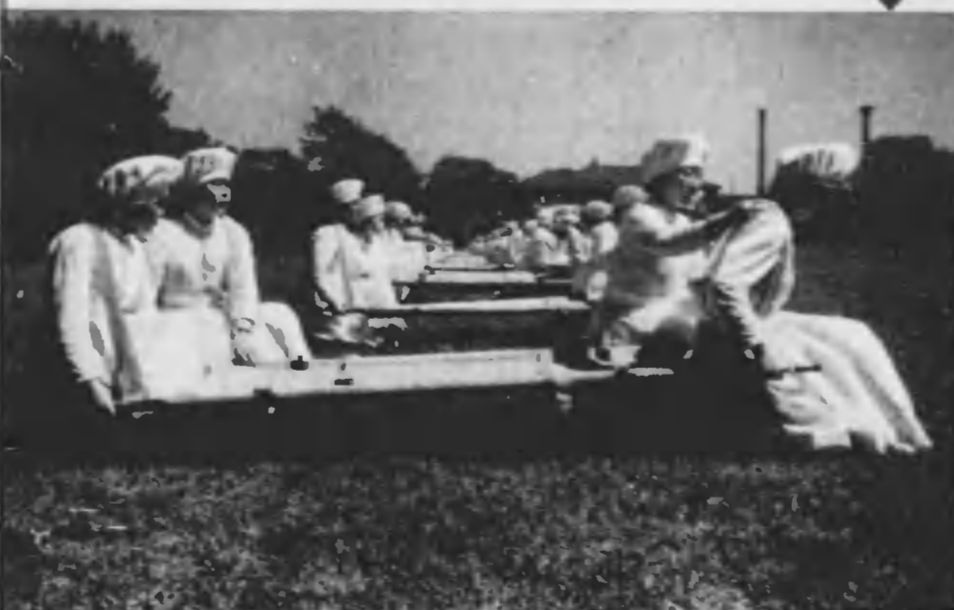
深 擔 れ く つ



るあて科學要主の生年一部成養は法搬運者患るぐめけ區を野戦の雨彈墜砲



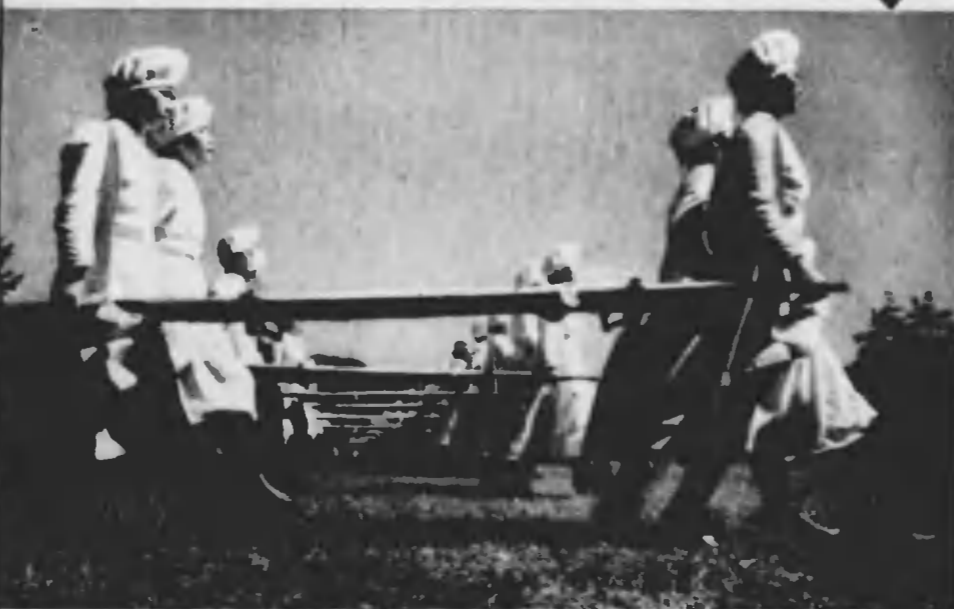
つ 待 を 命 の 次



架 擔 げ さ 右



め 違 り と を 深 擔 成 績 の 伍 擔 り な と 組 一 人 四 下 一 令 號



使 天 の 衣 白 に げ 姿 の と



め 違 け つ に 場 ち 持

卒業後十二年の應召義務  
 年限もとうに過ぎて、今は看護婦  
 会などを開き、赤十字の  
 精神を世に生かしてゐる看護婦  
 同方會員達も、鉄後の御奉  
 公を忘れまじと、奉任看護に  
 慰問に病院へやつてくる。  
 入れ歯の口から漏れる昔話  
 は、目清の思ひ出か、日露の  
 役か？ 夕食後養成生徒に聞  
 まれて黙然の一とき。

宿直、ただ聽へるは、傷兵  
 の安らかな寝息と左手のセコ  
 ンドを刻む時計の音、「異状  
 なし」と書く日誌の筆先はい  
 つか聽えて来る寝息に合せて  
 呼吸を数へホッと安心する。





きたへる日本精神  
講堂一ぱいに、愛宕の気合をひびかして、薙刀體操に  
全力をうちこむ。

手術洗手の用意  
このふくよかな胸に、おし氣もなくフクシン（赤イン  
キの一種）を塗りこめ、黴菌一つとめぬまで洗ひ落し  
なば、指先を培養基で試験してみる。多くの重病者を救  
ふ能なる院は、こうして、きよらかに磨かれてゆく。



徐州はついに陥ちた。  
日本放送協会はこの歴史的な大戦の状況を後世に伝えるべく、河内アナウンサーを現地に派遣し、凡ゆる技術的困難を克服して見事世界最初の現地放送に成功した。  
こゝに五月十九日より一週間にわたる現地放送の速記録を掲げて皇軍の苦戦と戦況と、生々しい戦場を再び懐裏に描かう。

五月十九日

故國日本の皆、祝賀の聲が日本に響き、われわれのマイクは現在非常なる困難と危険を冒して〇〇線に出動中であります。(中略)  
徐州を中心とする附近廣大なる戦場は東西南北にわたる火災を起し、本日午前中より突々と燃えつづけ、猛烈なる戦況は到るところに展開されて居ります。殊に徐州の南西側より南方方面にかけて火勢猛烈を極め、立ち昇る煙は戦場を蔽ひ、この完全なる陥落は九分通り完成したと思はれますが、困難なる市街戦と、今は暫くは目をさす支那軍の襲撃に、徐州全市は砲撃、銃撃、戦車の襲撃、彼我入り混じっての戦況は激しく、その壯烈さは筆紙に盡し得ず、目を奪ふものが隨所に展開されて居ります。徐州城々々各所に圍てられました日軍は砲撃の間に、圍でられ、或は倒れ、逃げつ、隠れつ、盡つ、勇壯と、萬歳と、無念とが入り混じって市街戦をつづけました。徐州の南を遠く去る西側、南側の部隊は敵が五年の日子を置して築き上げた堅固な陣地であり、今や数時間燃えつづけ、部隊を根絶し、敵部隊は或は潰滅され、或は辛くして退れ、大敵の捕虜は、死傷の惨状に依然として驚愕中であり、午後五時頃砲撃が所々に日軍旗を翻とひるがへるや、遠く徐州城東或は東南方の敵陣地、敵部隊よりは狂んに砲撃を加へ、数時間前とは完全に攻守を代へての陣地でありました。  
徐州の南には住民は全部を消し、唯一人の支那人の姿もありません。街中パニック、饑饉、妨害物等山と積まれ、わが軍の前進は極めて困難であり、北軍、南下軍の意気揚々と、困難と悲壯の文字は全く日本語から抹殺されて居ります。

〇〇おける河内アナウンサー



この轟々たる一大修羅場の中に赤黒い火炎が只今めらめらと立ち登り、戦車の響を加へてこの世の地獄、香、勝利の地獄を完全に展開して居ります。  
故國日本の皆、祝賀の聲が日本に響き、われわれのマイクは現在非常なる困難と危険を冒して〇〇線に出動中であります。(中略)  
徐州を中心とする附近廣大なる戦場は東西南北にわたる火災を起し、本日午前中より突々と燃えつづけ、猛烈なる戦況は到るところに展開されて居ります。殊に徐州の南西側より南方方面にかけて火勢猛烈を極め、立ち昇る煙は戦場を蔽ひ、この完全なる陥落は九分通り完成したと思はれますが、困難なる市街戦と、今は暫くは目をさす支那軍の襲撃に、徐州全市は砲撃、銃撃、戦車の襲撃、彼我入り混じっての戦況は激しく、その壯烈さは筆紙に盡し得ず、目を奪ふものが隨所に展開されて居ります。徐州城々々各所に圍てられました日軍は砲撃の間に、圍でられ、或は倒れ、逃げつ、隠れつ、盡つ、勇壯と、萬歳と、無念とが入り混じって市街戦をつづけました。徐州の南を遠く去る西側、南側の部隊は敵が五年の日子を置して築き上げた堅固な陣地であり、今や数時間燃えつづけ、部隊を根絶し、敵部隊は或は潰滅され、或は辛くして退れ、大敵の捕虜は、死傷の惨状に依然として驚愕中であり、午後五時頃砲撃が所々に日軍旗を翻とひるがへるや、遠く徐州城東或は東南方の敵陣地、敵部隊よりは狂んに砲撃を加へ、数時間前とは完全に攻守を代へての陣地でありました。  
徐州の南には住民は全部を消し、唯一人の支那人の姿もありません。街中パニック、饑饉、妨害物等山と積まれ、わが軍の前進は極めて困難であり、北軍、南下軍の意気揚々と、困難と悲壯の文字は全く日本語から抹殺されて居ります。



戦場のどよめきはまだまだ早い。勝利の喜びはまだ早い。一大潰滅戦は今後にもあります。徐州五十萬の大敵を殲滅するのはこれからです。わが南下、北上軍の包圍陣は縮小されました。この潰滅戦こそ最後の勝利であることを忘れないうで下さい。  
日本の皆、今夜は徹夜で我々日本の大勝利を祈願して下さい。(後略)  
五月二十日  
(前略) 今晩は關封方面に於て展開されました空中戦況を最初に御傳へ申し上げます。  
昨夜も御知らせ致しました通り、蒋介石直系の第八十七、八十八の兩師、並びに蕭東北軍の三十六師の三ヶ師は昨夜より今頃にかけてなほ強敵を擁して頑強に抵抗するを以てわが〇〇部隊は關封の東方に於て午前七時相対陣しました。  
この時突如、西の空より敵の戦闘機、高度約二千五百米より三千米を以て十機來襲、わが地上部隊を襲撃せんとする状況にありました。わが地上部隊は前面に蒋介石直系の精銳部隊を控へ、空中

よりは敵戦闘機十機の來襲があり、苦戦を思はれました時、更に突如北方より十三機の飛行機を認め、いよいよもつて危険と感し、直ちに空中攻撃の隊勢をとりました。しかし見ればそれはわが陸軍の飛行機でありました。高度凡そ三千米、黄河の朝陽が如く消え去つて行く青い空に、兩軍の飛行機を合せて三十三四機は今や將に相見えんとする一瞬でありました。  
地上部隊は暫し戦闘を止め、この空中戦や如何にと固唾をのんで汗を擧り、大空高く見つめるのみでありました。  
敵の編隊は先頭に二機、更に三機、三機編隊のものが三つ、わが戦闘機は全部三機編隊のものが四つ、敵の飛行機はイ一五五型。  
一瞬早く敵の飛行機を撃墜しましたわが飛行部隊は敵の側面に廻つて高度を高くしました。敵の飛行機はまだわが飛行機のあることを知らぬ構態であります。たゞ一文字に地上〇〇部隊に向つて進んで來ます。相對する地上部隊の協力ははやりました。これに乗じてわが戦闘機は完全に敵の背後に廻りました。一瞬わが戦闘機は完全に攻撃態勢十分と見せ、攻撃開始の合圖に左右の兩翼がブルブルと震ひ始めました。それと見る間に第一編隊長の兩翼もブルブルと左右に揺れ始めました。それと見る間もなくわが戦闘機は各自敵機に向けて背後を襲ひにかかりました。敵もそれと知るや茲に大空一杯と思はれる程味方二十數機が入り混じっての大空中戦が展開されて行きます。彼と我、射ち合ふ機銃の煙が糸を引きます。木の葉落し、或は逆轉、宙返りと息つく暇は勿論ありません。火蓋を切つてから僅か三分、三つの飛行機が火を吹き、煙をあげて地上目掛けて真逆線に落ちて行きます。約三千米の高度はいつの間にか約千米に降りてゐます。落ちたのは味方が敵が見極める餘裕は全然ありません。飛行機より撃ち出して命中しない弾が地上に落ちて參ります。たゞあれあれと手に汗を握る中、更に一機又一機、パラシュートがぱつとあちこちに開きます。地上にあるものは誰一人として撃たれるものはありません。猛烈な砲撃と、めらめらと燃えあがる赤い炎が目につきます。落ちて行く飛行機をみつめます。更に大空をみつめます。



やがて大空には舞ひ戻つた二機、或は三機集まり、悠々たる編隊飛行をつづけわが〇〇地上部隊の上を旋回しつゝ姿を消して行きました。この間の戦闘は僅かに十五分。わが地上部隊の全員は思はず我を忘れて拍手喝采、萬歳の聲は戦場に轟きました。  
かくて、意氣大いに揚つた地上部隊は全戦に敵を破つて關封附近重要據點を占領しましたことは既に皆様御承知のことと存じます。  
この陸軍の襲撃部隊は實にわが精銳寺西部隊長の率ひる部隊であることは、あとになって判りました。一機も漏さず十機全部を撃墜し、われに一機も損傷もなし(中略)この報告を全隊の皆様に届へする機會を得ましたことは私の最も喜ぶところでありました。全隊の皆、陸軍の襲撃部隊寺西

部隊を祝して下さい。  
更に退を轉じて徐州方面の戦況を申し上げます。徐州城は既に陥落し、皇軍部隊は徐州城に繰り入城しました。わが精銳部隊によつて治安維持に努めて居りますが、要所々々敗走の支那軍に破壊されて、眼を奪ふものがあります。街の四つ角には殆んど全部パニックが残り、その附近に散らしたる敵兵の死體も相當の數に上つて居ります。砲撃、機銃、鐵砲等は屋内に、街の中に、畑の中に無數に發見される有様です。燃え上る火炎は未だに諸方面に燃えあけて悲惨なる戦の跡を遺憾なく發露してゐます。  
しかし祝賀の聲が、徐州の街は今完全にわが手に落ちましたか、徐州會戦は今たゞ猛烈に續行中であり、一大潰滅戦は最後の一兵も残すまじと、決死の戦ひは今宵より十數時間に亘つて今もなほ繰繰されて居ります。  
徐州の街を襲つた敵の大軍は東へ東へ、或は東南方へと移動して居ります。飛行機より見れば、既に戦意を失つたであらう敵の大部隊が右往左往する有様が折柄の快晴に空中より明瞭に見ることが出来ます。わが地上部隊は東西南北より完全なる包圍陣地をとり、全部隊これ又完全なる連襲をとり、善接なる前進作戦をとつて居る構態であります。更に東へ進軍しましたわが部隊は全部大運河を渡りて敵陣地を一刻と縮小されつゝあります。  
これに應じ、わが空中部隊は凡そ十五分置き毎に次から次へと入れ替り、立ち替り、敵部隊の上空に勇姿を現はし、的確なる爆撃を加へ、敵兵も馬も大砲も猛烈なる砲撃と共に空中高く吹き上げて居ります。前線の各所に人間までも煙蓋を起して居る感じであり、中略、勝利、勝利への機越感がかつて體感したことのない強い刺戟となつて一瞬にぱらぱらと短銃の音を散らす敵の部隊は一方にとび去りますが、わが飛行機の姿が消え去るや忽ち一列隊隊を作り、東へ東へ、或は東南方へと前進する列を作つて進んで行きます。(中略)本日午前中にはわが包圍陣地は半徑八里でありました。現在恐らく半徑三、四里に縮小され、今晩關封に乗じて逃れる敵をおさへれば、明朝あた





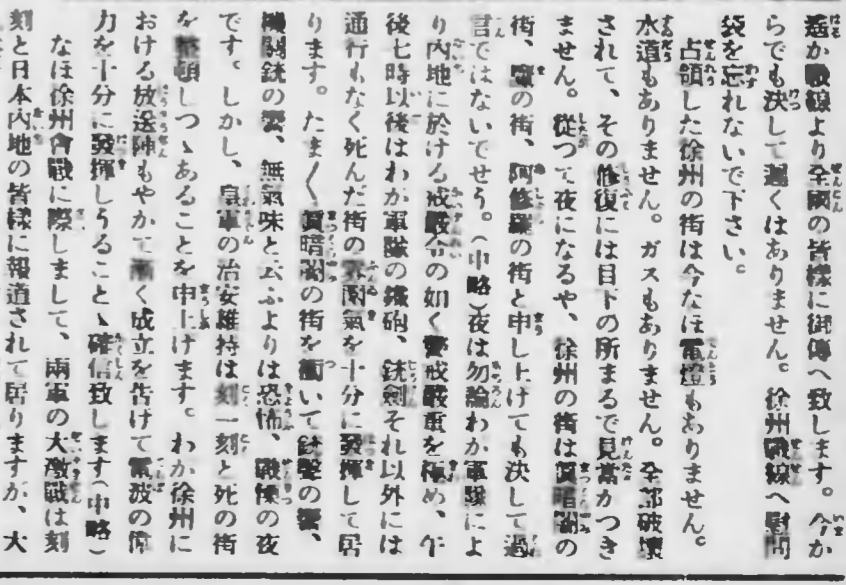
大運河渡河部隊、舟もも、主人の手綱に導かれ、河を渡る



難なる作業に従事して居りますことは申し上げる迄もありませんが、徐州陥落の報に接しました十九日、我々放送陣の技術員十数人が勇躍、〇〇戦線を出発、生々しい戦場の道なき道を超え、畑をこぎ、橋なき河を渡り、一路徐州へ、畑をこぎ、橋なき河を渡り、一路徐州へ、畑をこぎ、橋なき河を渡り、一路徐州へ



と思はせる情状を呈して居ります。而も何處から出て来たか、徐州の住民は既に戦線に戻り、我が家へ我が家へと立ち戻り、(中略) 獲た物を作つて備かばかりの家財、泥にまみれた荷物、警備の日本兵を恐れながらも、しほはとわが家に急ぐ支那の住民を考へますと、戦ひに敗れた國民の悲愴に慟し涙なきを得ません。



遙か戦線より全員の皆様に御傳へ致します。今からでも決して遅くはありません。徐州戦線へ慰問袋を寄れないで下さい。

東京よりの電報によりすれば徐州の陥落に際し、旅行列や揚子江を沿って神戶方面に皇軍勇士の武運長久を祈らるゝ由をききまして前線の將兵諸士は心より感涙し、一層の奮戦を誓つて居ります。このことは特に全員の皆様に御傳へ致します。

本日只今〇〇戦線は曇、星の影一つなし(後略)

五月二十一日 (前略) 徐州を中心とする附近一帯の戦場は本日快晴、輝々たる日光を浴びて一大激戦と、敗走の敵に對する追撃戦は今なほ徐州の南方津浦線附近に於て猛烈に行はれて居ります。丘に山に部落に想像以上の困難と苦害を超えて展開されて居ります。激戦、追撃の場所は刻々と移動して居ります。敵が敗走し、火を放つた部、遺棄、遺棄、又次々に移動し、火の絶間もなく、徐州は陥落より既に三日目に達するも一大修繕は依然として各所にくり返されて居ります(中略)

五月二十二日 (前略) 徐州の街には使所々々破壊された所極めて多く、崩れ落ちた煉瓦の塊が道路上に散らばり、焼け焦げた窓硝子の破片等は到る所に充満するといふ變東大震災の一部を思はせるものがあります(中略)

五月二十三日 (前略) 徐州の街は食料品は殆んどありません。僅かに糧食致したもののだけが毎日の食料品となり、その不自由なことは言語に絶し、入城の軍隊は互に食料を分け合ひました。晝飯も夕飯もありません。食糧にありつた時、あつた場所まで食事を摂るといふ有様であります。若しこの徐州の街に全隊から皆様の慰問袋が殺到するならばわが兵隊さんには喜ぶことと成りませう。現在の兵隊さんは食糧と水とがこの世に於ける最大の希望であり、最後の喜びであることを

五月二十四日 (前略) 戦線は連日灼きつけるやうな暑さのため

内地の皆様に申し上げたいことは、私が内地で想像して居りましたより余りにも困苦と疲勞とに悩まされつゝある將兵に絶對の感謝を捧げることであり、この聖は銃後の皆様に一層の御後援を切望するものであります。戦線にあるものにとりましては銃後國民の愛護こそ何物にも代へ難い最大の味方であることを強く御傳へ申し上げます。

徐州は陥落しました(中略) しかし、長期戦はこれからです。軍隊も、銃後の皆様に、軍民協力一致、唯長期戦へ前線あるのみ(中略)

五月十九日、徐州陥落の當日、〇〇戦線にマイクを移動致しましたこの戦線放送は本日寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見の日を以て一先つ終りました。

内地日本の皆様に御傳へ申上げます(中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

故國日本の皆様に御傳へ申上げます(中略)

五月二十五日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

五月二十六日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

五月二十七日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

五月二十八日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

五月二十九日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

五月三十日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

六月一日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

六月二日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

六月三日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

六月四日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

六月五日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

六月六日 (中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

私の耳にひびきます。眺める私の眼には涙が浮んで来ます(中略)

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見

寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見



寺内閣内閣最高指揮官の歴史的會見



嵐の如き送送の中  
送送一行は島島立つ



「お父さん、お母さん行ってまわります」  
「日本人の情さを見せて来るんだぞ」  
「今度帰るときはもつと併くなつて来るんですよ」  
息子を歸す父の言葉はわれら日本人のすべてが派遣團に送る言葉だ。



見送りの在京ヒットラー・ユイ  
ダント二十名。



# 送大日本青年獨逸派遣團



日本と獨逸とを青春で纏う青年日本の選士大日本青少年  
ドイツ派遣一行三十名は、五月二十五日午後一時が官  
民及び在京ドイツ人團體の盛んな見送りの中を東京驛發、  
明れの社路にのぼつた。  
一行は朝比奈國長氏を團長に幹部四名、大日本聯合青  
年團の代表十四名、大日本少年團幹部の代表七名、帝國少年  
團の代表四名からなり、いづれも十七歳から二十五歳  
までの若者とした。若人、農業者、學校教員の各五名をはじめ、工  
業労働者三名、漁業、商業、海産見習、木材、農具機械業  
派遣隊員各一名、残りの六名が學生生徒、出身府縣も十九府  
縣にまたがり、學歴も大學卒業から青年學校在學者になつて  
ゐる。即ち、年齢、學歴、職業から見ても、地域的な方面から見ても、  
この二十五名は眞に青年日本の代表といふことが出来る。  
送送一行は、團長として選出された朝比奈國長氏、その一擧手一投  
足にあつた。大日本少年團の青年代表を示すため、朝比奈氏の文化  
修養、學業、國防等についての理解を深めるとともに、ドイツ  
の事情にも通じ、團長の一擧一動をも知つておくため、去る五  
月三日から出發の前日  
まで日本青年館に合宿  
して團長、ドイツ語  
會話、見學、野外  
訓練に、行軍に熱しい  
訓練が行はれた。  
一方、ドイツからの  
派遣隊員ヒットラー・ユ  
イダント代表三十名も  
八月中旬來朝、約三ヶ  
月にわたり日本各地を  
視察、わが青少年と交  
渉する機会である。團  
長朝比奈の未來を要請に  
應じ、大日本少年團の團  
長が手交されたとき、  
朝比奈は千鳥の若人にも  
とより、防共の誓ひも  
送る。送るの誓ひはま  
ます深められること  
であらう。

「それでは」「御機嫌よう」  
朝比奈團長と、見送りの在京ヒ  
ットラー・ユイダント代表シム  
ツム氏は東京驛ホームに固い握手  
を交した。

「天皇陛下萬歳！」  
出發を前に送る宮城を拜し、  
往く若人、送る若人の聲は東京驛  
頭を轟かした。





野営のうちでも一番楽しいものはキャンプ・ファイアのひとときであらう。空には降るやうな星のまぶしき地には赤々と燃える篝火、その篝火をかこんで、獨逸話話の練習、獨逸の話、さてはヒットラー・ユーゲントの歌の合唱、若人の高らかな歌聲は武蔵野の間にこだまし、若き血は篝火とともにもえ上り、若き夢は洗れる星を追ふて未知の國にはせる。

初夏の陽は緑の林に燦々と降りそそぐ。労働奉仕訓練を終へた若人たちのシャベルの行進、軍事教練で鍛えあげた身だ。獨逸の友達に見せてもはづかしくないだけの訓練振りもうちやんと出来上つてゐる。

武蔵野の小さな川に陽は落ちる。鳥の聲も閑遠になつた林にコンコンと杖を打つ音があたりの静寂を破る。ヒットラー・ユーゲントに負けないやうにちまぐ強らうぜ！「よし来た」楽しい今宵のキャンプを強るにも負けじ嫌ひの日本青少年の気性が汗ばんだ腕にぐつと力を入れさせる。

ペコペコに空いた腹に、飯食の飯の何といふ美味さ。一本の蠟燭の灯がほのかに照し出す中にとけ合ふ友情の嬉しさ。

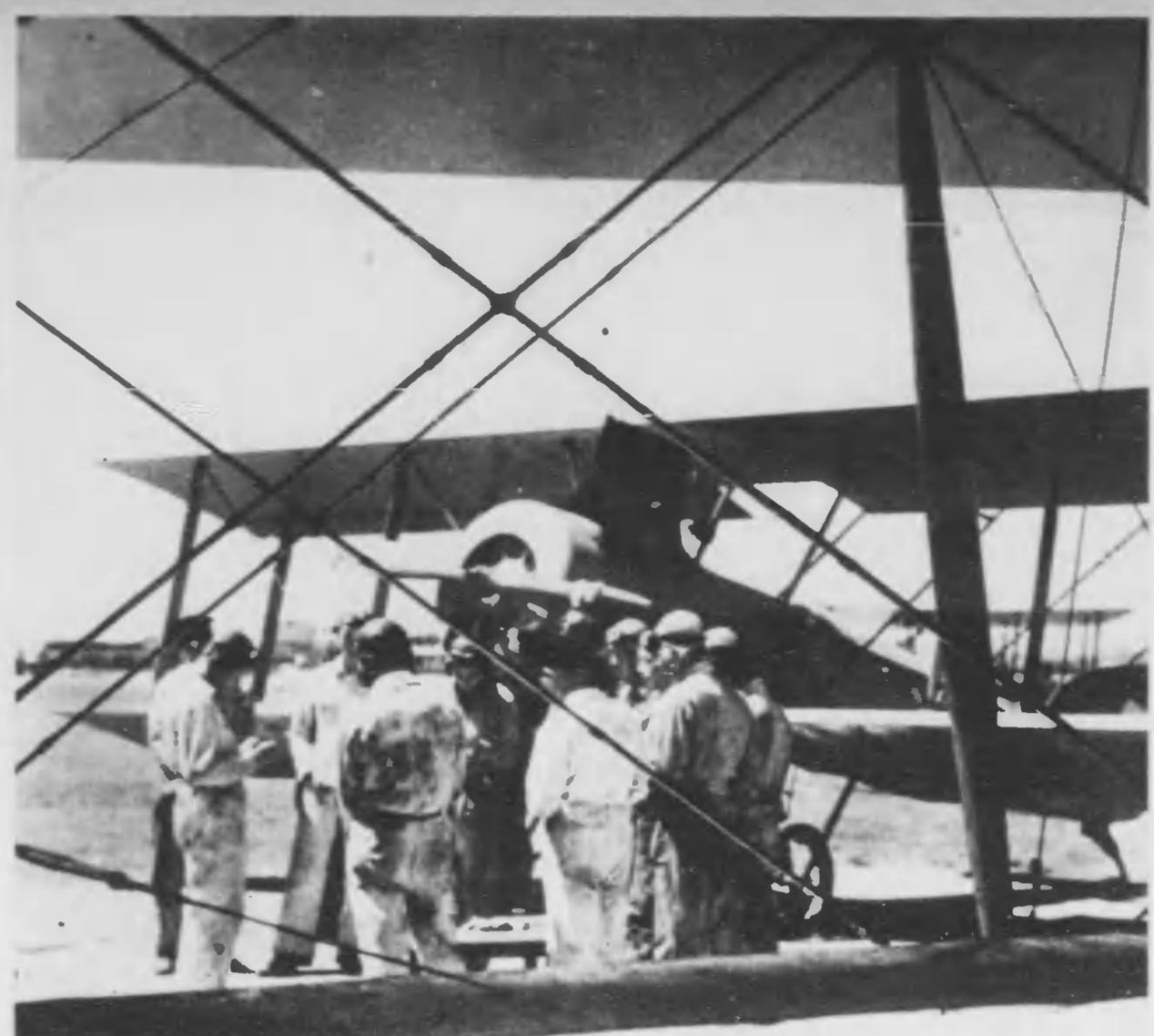
大地を枕に、若人の夢はいづくにはせる。講義に聴いたベルリンの街か、ニュールンベルクの森か。



ここに派遣員員の合宿訓練のうちの野營訓練を紹介しよう。一行は東京市外久米川の緑一色の武蔵野を野營訓練場に選んだ。



読者のカメラの



書いても空  
大空に響く  
東京市 林 賢二  
東京市を飛つてくる風  
はもうつかり度た  
あつた飛行機を  
あつた音が、は  
飛行機が羽を  
心不意に、今  
は大きい、大空への

**寫眞募集規定**  
本誌は「寫眞週報」の一助にも  
考へ、出来る限り紙面を開放し、  
のカメラを動かす、優秀な技術を持つ  
てゐる。題材は内外皆宜、國策の宣  
傳に關するものならば何でもよい。  
例へば河川、田圃、風景、工場、  
家庭、學校など、所々に於ける、  
國民精神、國民生活、或は手  
節と世相の面白い組合せなどもど  
うでもよい。一枚の寫眞でも、  
の寫眞でもよく、切期日は決定せ  
ず、サイズはキヤメネ以上、掲載  
の分には海又は記念品を贈呈し、  
寫眞作品は一切返却せず。  
内閣情報部



**寫眞週報 (禁煙版)**  
昭和十三年六月八日印刷發行  
發行所 内閣情報部  
東京市神田區本町  
内閣總理大臣官舎内  
大日本印刷株式會社  
東京市牛込區市谷  
加賀町一ノ二番地  
印刷所 大日本印刷株式會社  
東京市牛込區市谷  
加賀町一ノ二番地



所 込 申	價 定	寫眞週報 (禁煙版)
東京市神田區本町二丁目二〇番地 電話東京三六八〇	一 部 十 錢 一 年 (前金) 四 圓 八 十 錢 (外埠郵便代別加)	昭和十三年六月八日印刷發行 發行所 内閣情報部 東京市神田區本町 内閣總理大臣官舎内 大日本印刷株式會社 東京市牛込區市谷 加賀町一ノ二番地
寫眞週報配送部 東京市神田區本町二丁目二〇番地 電話東京三六八〇	一 年 分 未 滿 郵 送 御 希 望 の 方 は 一 部 十 錢 の 割 合 を 以 て 前 金 を 添 へ 御 申 込 み 下 さ い	郵 送 代 金 別 加
全國各地官報販賣所 東京市神田區本町二丁目二〇番地 電話東京三六八〇		
東都書籍株式會社 最寄書店・發賣店 各地新聞販賣所 寫眞材料店		

正 誤  
第十五號日曜版の記事中「一等」  
「一等」とあるは「一等」の  
誤りにつき訂正いたします。

今週のキヤメラ  
表紙(と愛と) 土門 拳  
赤十字のもと 陸軍省醫務局  
輝く白衣 土門 拳  
徐州放送 同盟特選員  
大日本青少年 丸門 慎一  
大逸派 丸門 慎一  
應募作品

眼

第一級の中藥科眼はルイマス  
は用作療治るな適快の其在存  
とるす効奏に速迅に疾眼の種各  
刺潑の眼に快明を力視に共  
！るす調強を能機理生るた



眼は生活感情の最も  
尖鋭なる觸手だ！  
流動し交錯し混迷する  
現實相は強き眼によつて  
のみ把握される！  
スマイルの眼に榮光あれ

新 人 の 眼 科 藥  
ルイマス

店商置主 社會式株 店理代總

價 額  
0.25  
0.45  
藥店にあり

# 日滿一如

躍進満洲の實情認識は銃後國民刻下の急務なり



満鉄道總局

内地・朝鮮より  
往復・回遊汽車賃  
單獨 二割  
團體 十人以上 三割  
二十人以上 五割  
學生團體 五割引以上

詳細は  
満鉄鮮満案内  
東京丸ビル  
大阪堺筋  
下關驛前

奉天北

富貴週報 昭和十三年三月十二日 第三三三號 郵政省認可 昭和十三年六月八日發行 (第一編) 滿洲日報 第十七號

(本書の大きさは縮尺規格A4・「週報」倍判)